



西野節男、『インドネシアのイスラム教育』
勁草書房, 1990, 475p.

評者がかつて中部ジャワ州、クドゥス市の近郊農村でフィールド調査を行なった時、中・東部ジャワで影響力の強い保守系イスラム組織である NU (Nahdlatul Ulama ウラマの覚醒) の牙城の一つであったその村落には、中央の村随一のモスクと並んで、かつて栄えたプサントレン跡があった。その当時は既にただ二階建ての建物が残っているのみで、数人のサントリがそこで寝泊まりしているだけであったが、人々の証言によれば、かつてこのプサントレンの主宰者であったキアイが全盛の時は、優に二百人近い生徒が周辺の各地から集まって、その教を請うたという。

このキアイの子孫達は、寧ろそのプサントレン跡の近くに建てられたイスラム小学校 (Madrasah Ibtidaiyah) での教育に力を入れており、既にここにもイスラム教育制度をめぐる微妙な変化の兆しが伺われた。だが何よりも印象的だったのは、この村での NU のリーダー達が、NU の生き延びる道は教育にしかないと強く自覚していたという事である。当時は NU が PPP (Partai Persatuan Pembangunan 開発統一党) から脱退する、しないでもめていた時期であり、NU が政治の舞台からますます撤退する兆しを見せていた訳だが、それゆえ教育こそが残された牙城である、とある種切迫した心情を伴って意識されていたのであろう [福島 1986]。

こうしたイスラム教育への関心の高まり、とりわけ伝統的イスラム教育の中心であるプサントレンの役割については、例えば Dawam Rahardjo に代表されるイスラム系知識人の間でも、政府主導の開発に対するイスラムの草の根的開発という意味で、ある種の代替案としての脚光を浴びており、その事は様々な講演会やインドネシア語の出版物、即ち Dawam Rahardjo その他のプサントレンについての一連の調査研究 [Rahardjo 1974] や、特に Zamakhsyari Dhofier による包括的な研究

[Dhofier 1982] 等に見て取る事ができる。

だがインドネシア語以外では、このプサントレンについての詳細な実態調査は決定的に不足している。インドネシアのイスラム教育について総括的に扱った Steenbrink の著作 [Steenbrink 1974] も、イスラム教育制度の歴史的発展を包括的に捉えるには貴重ではあるが、プサントレン教育の実態調査としては不十分な点が目立つ。英語圏でもプサントレンの実態調査は皆無に等しく、散発的な論文 (例えば Castles のプサントレン・ゴントール観察記 [Castles 1966] や Orr その他による村落のマドラサーをめぐる分析 [Orr et al. 1977]) が多少ある程度である。又日本語に到っては歴史的な研究が多少散見できるに過ぎない [小林 1988]。

こうした研究の現状の中で、西野のこの著作は重要な地位を占める労作である。プサントレン研究の難しさは、それがキアイを中心として自律的に成長してきた制度である故に地方的偏差が激しく、その規模や教育内容の傾向、あるいは近年の歴史的変化の度合いといった複数の要因によって、様々な形態を取りうるという点にある。この事がプサントレンについての一般的定式化を困難にしているのだが、西野自身、そうしたプサントレンの多元性を充分認識しており、寧ろそこに記述の重点を置いている。この作品は序、及び結論を含んで全部で五つの章からなるが、その大半を占めるのは、様々なタイプのプサントレンの教育制度に対する周到な記述である。

序章ではインドネシアに於けるイスラム教育体制が概括的に論じられ、その中でプサントレン教育が持つ位置と重要性が示される。二～四章は、ある意味で全てプサントレン教育の具体的な記述に費やされており、先ず第一章では「プサントレン教育の伝統的な姿」を中心として、Djajadiningrat, Geertz 等のプサントレン生活の概括的な記述を参照しつつ、プサントレン教育を構成する枠組みを提示する。

第二章は「プサントレン教育の実態と変容」と題され、先ず最初にプサントレンに関する幾つかの類型論を紹介し、更にイスラム教育政策の変革の歴史とそれに対するプサントレン側の反応を略述した後、六つの代表的な大プサントレンについて詳細に記述していく。この六つのプサントレンは著者も言

うように、二つずつペアになっており、最初の二つ（スルヤラヤとルソジョ）はタレカット（イスラム神秘主義の実践）で有名であり、次の二つ（テブレレンとリルボヨ）は東ジャワ・プサントレンでも、伝統派の牙城といった面持ちの存在であり、そして最後の二つ（クラピヤとゴントル）はある種の教育改革の実践で有名である。この六大プサントレンについて、創設期からの歴代のキアイや関連した事件等も含む歴史的発展、及び現状（教育その他の組織構成、一日のスケジュール、授業の具体的な内容や使用されるテキスト、そして授業外活動等）が細かく記述されていく。

第三章はマグラン県のプサントレン・テガルレジョという例を中心に、その周辺にある様々な地理的なレベル（即ち同じテガルレジョ郡から七つ、マグラン県から三つ、そして旧クドゥ理事州の中の特にクブメン県から計七つ）のプサントレンとの相互関係を見ている。ここでは実態調査という点もあって、キアイの親族や授業の内容のみならず、その他の活動（経済、社会教育等）に関しても記述がなされ、とりわけ十数名のサントリ達について、その家族背景や経歴が列挙されている。これらの詳細な記述のまとめの部分では、このプサントレン・テガルレジョの影響を決定づける要因として、ある種の伝統的な聖人崇拜との関係、学習方法の能率化（特定のキタブについて集中的に学ぶ）、サントリの出身地域別編成の成功等が指摘され、一方サントリが遍歴するという伝統的な形態が崩れてきたとしている。又マドラーサー制度の導入に関しては、第二章の大プサントレンに比べて、その導入が後れている事が示唆されている。この全体的な記述の圧倒的な量に比べて、終章は簡潔である。ここでは先ず学校制度がプサントレンに導入される事で、学習方法の固定化、出入りの自由の制限、広い意味での同胞意識の低下、遍歴の低下と内部の硬直といった四つの影響が現れるとされる。しかし一方キアイの絶対性と、プサントレンの地理的配置（農村中心性）は学校制度が導入されても変わらないとし、又より積極的にはこうした学校教育の導入によって、近代部門にプサントレンが影響を持ち、従来の西洋近代学校とイスラム学校の二元的対立の解消にも繋がるという評価もなされている。

このようにこの書は、極めて多元的でその全体像が掴みにくいプサントレンを、その具体的な事例を様々に対比するという手法を通じて、そのイメージを浮かび上がらせようとしている。その事例の圧倒的な多様さと豊かさは他のプサントレン研究に比しても群を抜いており、Dhofierの著作でさえ具体的には大小一つずつの実例しか挙げておらず、西野のような立体的な構成は持っていない。

勿論こうした徹底的な事例中心主義にはそれなりの欠陥もある。とりわけ終章で述べられる結論は、この膨大な事例の記述の過程で浮かび上がってくる様々な問題群とはやや遊離しており、例えば評者が強い関心を持つキアイのカリスマを支える基盤とその変容の問題に関しても、幾つかの事例ではそれに抵触する記述（例えばタレカット中心のプサントレンのケースや、キアイと聖人崇拜の関係とか）が得られて興味深いものの、それらの問題群はあくまで事例の中に紛れ込んでしまい、全体的な議論の枠組みの中には入ってこない。勿論この著作は「教育」についてであり、カリキュラムや実際にどういったアラビア語のテキストが用いられるか、あるいは学校教育とプサントレンの関係といったテーマに筆者の関心が集中するのは当然である。しかし教育も又社会関係のマトリックスの一部であり、更にプサントレンの教育の特色がキアイや他のサントリ達と寝食を共にする事による独特の経験の共有という点にある以上、こうした側面も等閑視できないはずである。

評者が調査していた村の有力者の長男は、クドゥス市内のプサントレンで寝起きしつつ市内の学校に通っていたが、彼が好んで話してくれたのは、このプサントレン内部の様々な人間関係であり、キアイその他に対するサントリ達の複雑な感情や、サントリ間の対立、さらには思春期特有の問題のサントリ的処理の方法等であった。こうした側面（言わばプサントレン教育の丸山真男の意味での密教的側面）も又、このシステムがサントリにもたらす意味の構造を支える重要な構成要素なのではないだろうか。

多分こうした論点、あるいはプサントレンをめぐる拡大された別の観点、例えばプサントレンと政治の関係、更に地域開発とプサントレンといった様々なテーマは、ある特定のプサントレンに関する、長

期的な人類学的調査を必要とするのだろう。西野も正しく強調するように、プサントレンの実態は極めて多様であり、今後更に綿密な民族誌が必要とされる筈である。西野のこの著作は、その具体的な記述の中にそうした将来発展可能な様々なテーマを盛り込んでおり、その可能性は著者自身の限定された結論に止まらず、読者自身が自由に発展できるものである。その意味でこの研究は後続の研究の可能性を既に様々な形で内包しているのである。

参 考 文 献

Castles, Lance. 1966. Notes on the Islamic School at Gontor. *Indonesia* 1 (April).
 Dhofier, Zamakhsyari. 1982. *Tradisi Pesantren: Studi tentang Pandangan Hidup Kyai*. Jakarta: LP3ES.
 福島真人. 1986. 「イスラムリーダーにおける信念と演技——ジャワ伝統派イスラム、意識とその変容」『季刊人類学』17(3).
 小林寧子. 1988. 「19世紀末のジャワのイスラーム教育とプサントレン」『アジア経済』29(10).
 Orr, Kenneth et al. 1977. Education for This Life or for the Life to Come: Observation on the Javanese Village Madrasah. *Indonesia* 23 (April).
 Rahardjo, Dawam, ed. 1974. *Pesantren dan Pembaharuan*. Jakarta: LP3ES.
 Steenbrink, Karel. 1974. *Pesantren, Madrasah, Sekolah: Recent Ontwikkelingen in Indonesisch Islamonderricht*. Krips Repro Meppel.
 (福島真人・東京大学 東洋文研)

W.G.J. Rummelink. *Emperor Pakubuwana II, Priyayi & Company and the Chinese War*. Leiden: Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, 1991 forthcoming.

本書は1725年から45年にかけてのジャワ・マタラム王国史の研究である。著者は本書により1990年6月にライデン大学から博士号を授与された。著者はまた、現在「日蘭学会」の常任理事として在日している。なお本書は私家版として出版されたが、91年中にもライデン大学王立言語民族文化研究所から公刊される運びである。

本書が編まれるに至る経緯はオランダ人東洋学者の学問的な経歴の幅の広さを示して興味深い。

著者ははじめライデン大学で Sinology を学び、1972年から74年にかけては京都大学人文科学研究所の島田虔次教授について儒家思想の研究をし、修士論文は戴震(1724~77)に関するものであった。ジャワへの関心は、ガジャマダ大学で歴史及びオランダ語の教師として着任した1977年以後のことであったが、結局そこに84年まで7年間滞在し、本書の中核をなす「中国人反乱」に関する部分を書き上げた。私は1989年に、国際会議の事務局の仕事を一緒に行う機会があったが、著者が中国語、日本語、インドネシア語、ジャワ語に習熟し、それぞれの文化と社会について該博な知識をもつことに感嘆することしばしばであった。

さて、著者はたまたまジャワで仕事をする機会があり、中国史の知識をジャワ史研究で生かす上で、1740年から43年にかけて全ジャワをまきこんでくりひろげられた大反乱(いわゆる「中国人反乱」)へと関心が向けられたときりげなく述べているが、このテーマの選択はジャワ史研究の新しい局面を拓くものとして、まことに時宜に適ったものであったと思われる。そのことに触れるのに先立って、先ず本書の構成を簡単にみておこう。本書の目次は次の通りである。

Introduction

- I. King, Priyayi and Company
- II. The Eclipse of Danureja
- III. The Rise and Fall of Arya Purbaya
- IV. The War, Part I
- V. The War, Part II
- VI. The Babad

本書が扱う時代は、ジャワのマタラム王国でその第八代目の王位にパクブオノⅡ世(在位1726~49)が就いているほぼ20年にわたる時代である。その主要な舞台になるのは、当時の王都であったカルタスラの王宮であるが、それとともに、オランダ東インド会社の総督府のあるバタビア(現在のジャカルタ)、会社の出先でマタラム王国との折衝の窓口をなすスマラン、さらに、当時マタラム王にとって最大の強敵であったチャクラニングラットⅣ世の支配下にあるマドゥラ島も、重要な役割を担っている。このほかに、マタラム王の勢力下にある各地の動向や、当時、米の産出地帯としてとりわけ重要であっ